

京都大学本「源氏大鏡」について

——「源氏大鏡」二類本二次本考——

田 坂 憲 二

筆者はかつて、従来は源氏大鏡二類本の中に位置づけられていた細川文庫本「袖鏡」が、二類本中極めて特異な本であり、他の二類本諸本とは一線を画さなければならぬことを指摘したことがある^(注1)。その後、源氏大鏡の諸伝本の調査を継続する過程で、京都大学文学部国文学研究室に細川文庫本と同系統の本が蔵されていることが判明した。

本稿は、当該本に関する私なりの調査を報告し、併せて二類本異本系統の問題について考察せんとするものである。猶、京大本自身には「源氏大鏡」という書目はどこにも記されておらず、目録上は、小口書によって「源氏物語」とされている。表題にかかげた「源氏大鏡」とは、内容から便宜上、私に名付けたものである。

一

「源氏大鏡」「三帖源氏」「浅間抄」「源氏無外題」等、様々な異称をもちながら、相互に密接な関係をもつ一群の源氏物語梗概書に「源氏大鏡の類」と呼称を与え、一々四類の四系統^(注2)に分ける卓説を示されたのは稲賀敬二氏であった（『源氏物語の研究』^(注3)）。京都大学本も同書の中でその存在については指摘があるが、氏自身同本が何類本に位置づけられるかは明示されていない。

但し、稲賀氏以前に京大本と他の源氏大鏡諸本との関連について若干触れたものは存する。先ず藤田徳太郎氏が「源氏物語梗概書目解題」「同補遺」^(注4)において、京大本を「異本源氏大鏡」と紹介し、第三高等学校所蔵本「源氏浅

聞抄」・図書寮本「浅聞抄」と同系統とされている。次に宮田和一郎氏は「源氏物語古鈔の一考察（一―三）^{（注5）}」の中で京大本の存在に言及され、刈谷図書館本「源氏浅聞抄」・図書寮本と同系統とされているが、三高蔵本は別系統とされている。これは宮田氏の説が正しく、三高本は、稲賀氏の分類基準によって位置づけるとすれば、第一類本に属させるべきものである。又、東京堂版『源氏物語事典』下巻「注釈書解題」の中で大津有一氏は「浅聞抄」の項に書陵部本、刈谷図書館本・桃園文庫本・天理図書館本・細川文庫本と共に京大本を挙げられている。これに稲賀氏が二類本としてあげられている諸本を加えて、諸氏がどの伝本を同列に取り扱っているかを一覧したのが次表である。

京大本 書陵部本 刈谷図書館本 桃園文庫本 天理図書館本 細川文庫本 永青文庫本 稲賀氏所蔵本 吉田幸一氏蔵 源氏物語抜書抄	藤田	宮田	大津	稲賀
	○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

諸氏の間で列挙される伝本に出入りがあるが、藤田・宮田・大津氏共に京大本を図書寮本や刈谷図書館本、即ち稲賀氏が二類本と認定している諸本と同系統のものとみていることを確認しておく。

次に、京大本そのものの考察にはいるが、その前に該本の書誌について簡略に記しておく。

京大本は文学部国文学研究室の所蔵（国文学Mj 1a）。大本（縦三〇・〇糎×横二一・〇糎）の袋綴、三卷三冊。外題内題共に欠く。僅かに背の部分に墨筆で、又、下小口に朱筆で「源氏物語 一（一三）」との小口書を有する。栗色無紋表紙。本文料紙は楮紙、見返しは本文共紙。本文は一面十二行書。一行二〇字前後、用字は漢字平仮名。和歌は概ね本文より数字下げて記すが、地の文が後続するか否かは一定しない。全卷一筆、かなりの速筆で書かれ、書写年代は近世中期頃か。墨筆にて若干の書入れやミセケチがある（本文と同筆）。蔵書印は「京都帝国大学図書」印のみ。明治四十四年十一月一日の登録印が存する。

各冊の所収巻・紙数は以下の如くである。

第一冊 序・桐壺——明石 墨付九四丁 遊紙首のみ

一丁

第二冊 濡標——藤裏葉 墨付七〇丁 遊紙首尾

各一丁

第三冊 若菜上——夢浮橋 墨付九六丁 遊紙首尾一丁

源氏大鏡の類は、三冊本の場合、桐壺―花散里、須磨―藤裏葉、若菜上以下と三分冊になるのが一般的であり、京大本のように明石・濡標間で巻冊を分ける場合は珍しい^(注7)。三分冊の丁数にやや出入りがあることから考えて、京大本も祖本の段階では現在のような分冊ではなかったのかもしれない。

猶、京都大学国文学研究室には、本稿で取り上げたもの以外にも源氏大鏡の写本が存する。「源氏大鏡(外題)」三巻二冊(Mj_{2a})・「源氏大鏡(内題)」二巻二冊(Mj_{2b})・「三帖源氏(外題)」三巻三冊(Mj_{2c})の三部で、全て一類本であり、何れも宮田氏前掲論文中に言及されている。

二

細川文庫本「袖鏡」は序・桐壺巻以下朝顔巻辺り迄は、各巻頭の部分等若干の例を除いては、他の二類本諸本とほぼ重なり、同一系統の写本と思われるのだが、少女・玉鬘巻を境としてはつきりと他本と異なってくるのである。京大本も又、細川文庫本と軌を一にして、他の二類本諸本との間に大きな差をみせている。

やや長文の引用となるが、典型的な例として柏木巻々末近く、柏木未亡人落葉宮を見舞いに夕霧が一条邸を再訪す

る場面を示す。猶、以下において二類本諸本の代表として吉田幸一氏蔵「源氏物語拔書抄」^(注8)を使用し、必要に応じて書陵部本・刈谷図書館本・永青文庫本の校異を示す。

〔拔書抄〕やよひのすゑに、一条のみやへ大將まいり給へは、かしは木、わかかえてのすゑ、しけりあひたれは、おちはの御かたにさしよりて

① ことならはならしのやと^②にならさなんはもりの神のゆるしありきと

①刈・永「大將」②刈「やと」ヲミセケチニシ
「枝」ト朱書。永「枝」但シ「宿」ト傍書アリ。

〔京大本〕卯月はかりの空は、そこはかとなく心ちよけに、一つ色なるよもの木すへもおかしう見わたさるゝを、右衛門のかみの、例のわたり給へる庭もよもき所えかほ也、夕霧一条のみやにとふらひ聞え給ふに、前栽つころひ給ひしも、心にまかせて茂りあひ、一村すゝきもたのもしけにひろこりて、虫の音そはん秋思ひやらるるより、いと哀に露けて分入給ふ、いよすかけわたして、にい色のきちやうの衣かへしたるすきかけ涼しけにみえて、おまゑのこたち共思ふ事なけるけしき也^②柏木と楓と枝さしかはしたるを見給ひて、忍ひやかにおち葉の御かたにさしよりて

③ ことならはならしのやとにならさなんはもりの神の

ゆるし有きと

細川文庫トノ校異。表記ノ相違等ハ略ス。①「おちばへ」ト細字アリ。②「ごだちとはにやうほうたちなり」ト細字アリ。③「ゆふきりの大将」

京大本・細川文庫本は他の二類本に比して源氏物語原典の本文を大幅に取り入れ、極めて、詳しい記述になっている。この量的拡大と、梗概本文の源語原典への接近という事が最大の相違点である。又、一類本・三類本のこの箇所はいずれも抜書抄以下の二類本とはほぼ同文である。

この様な例は無数に存し、京大本・細川文庫本と抜書抄以下の二類本流布本系統との間には、明確な差があるのである。又一方、両系統の距離が比較的近い朝顔巻以前でも特に京大本・細川文庫本の親近性は動かしえない。たとえば、稲賀氏が一―三類に分ける基準の一つにされた序文の部分は、京大本、細川文庫本も他の二類本諸本とはほぼ重なるが、この二本のみは序末尾近く、共に約四百字程の文章を欠く。これはその分量から考えて一丁程度の落丁が原因であろう。此様な長文の脱文が偶然共通するはずがなく、細川文庫本、京大本共に、同じ落丁を有する本から分れたと考えるべきであろう。以上述べたように、従来書陵部本や刈谷図書館本と同列視されてきた京大本は、それら諸本とは明らかに異質の部分^(注10)を有しており、対して細川文庫本とは極めて近い関係にあることが確認できるのである。

従ってこれまで二類本とされていた諸本は

二類本一次本……抜書抄・書陵部本・刈谷図書館本・永青文庫本他

二類本二次本……細川文庫本・京大本

の様に分けるのが適切であろう。以下、本稿でもこの呼称を用いる。旧稿では、異本的立場^(注11)という用語を用いたが、複数の伝本が存在していること、京大本と細川文庫本は増補本であることなどから、一次本、二次本という呼称がより妥当であると考ええる。

三

二類本二次本において複数の伝本が確認されたことにより、両本を対校して誤脱の少いよりよい本文を得ることが可能となる。

京大本・細川文庫本によって相互に脱文を補える箇所を葵巻より一例ずつあげておく。

○御息所はいと、物思ひみたれて御むすめの（斎宮にくして伊勢へ下らん事を思ひ立給ふ、以上細川文庫本ナシ）車あらそひのまゝ、御心もうかれて、たちまちに霊となり給へり。

○こさんはいまたしく思しめす（に、にはかにその御けしきありてなやみ給ひて、御みつから、以上京大本ナ

シ)源氏をよひよせてたくし給。

単語単位の小規模な誤脱は相当数存するが、十字以上の長文の脱文は二十八例にのぼる。このうち、細川文庫本によって京大本の誤脱を補えるものが二十二例、逆に京大本によって補えるものが六例である。三倍強の脱文を有していることから、京大本の書写態度は細川文庫本のそれに比べてやや厳密さを欠いていることが伺えよう。この誤脱の殆どは書写者の不注意によるものと思われる。その典型として桐壺巻の用例をあげてみる。

風野分たちてはたさむきゆふくれのほとつねよりもおほし出る事おほくて、夕月夜おかしき(ほと、若宮の御かたへ御つかひあり。おかしき、以上京大本ナシ)とは月花などのうつくしくおもしろきをいふなり。

これは接近して二箇所存する「おかしき」という文字に移りして、約一行分飛ばして書写してしまったものであろう。「御つかひあり」までは物語の梗概を述べる部分、「おかしきとは月花などの」以下は語義の注釈的部分である。京大本の如く括弧内の箇所一行分を欠くと、本文と注記の部分が混入してしまい意味をなさなくなる。

二十八例の相互脱文の多くは此様なものである。但し、京大本によって補える六例中、次の二例は細川文庫本の形でも、必ずしも妥当性を欠くとはいえないものである。

○此夜近か付よりて、年頃の心さしの程かたり給へは

(折しも風いと心ほそう吹て虫の音も鹿の啼音も瀧のをともひとつにみたれてゑんなる程なり、大將なにやかやとかこち給へは、以上細川文庫本ナシ)

我のみやうき世をしれるためしにてぬれそふ袖の名をくたすへき

〔夕霧〕

○かく人まいふとなとの事は大將の君取分てつかうまつり給ふ。(花散里、明石の上な共此院へ渡り給ふ。以上細川文庫本ナシ) 弥生の十日なれば花さかりにて

〔御法〕

括弧内の文章を欠いても、前後のつながりは不自然ではなく、次節に述べるような京大本の性格から考えて、細川文庫本には本来は存せず、京大本もしくはその祖本が源氏物語の原典の本文を詳しく補ったと考えるべきかもしれない。(次節参照)

ともあれ、京大本、細川文庫本はそれぞれ用例の多寡はあるものの、相互に補いうる長文の脱文が存することから、両者の間に直接の書写関係は成りたちえないことは確認できよう。

四

次に京大本と細川文庫本との関係に的を絞って考えてみ

る。この両者は極めて緊密な関係があり、又相互に相補う脱文を有することから、同一祖本から分化した兄弟本かとも思われるが、必ずしもそうではないようである。用例的にはさほど多くはないが、この両本間の異文には、単純に書写段階で生じたとは考え難いものが存する。匂宮巻々頭の例で示す。

〔抜書抄〕 ひかりかくれ給にし後、その御あとにたちつき給ふへき人、そこらの中にまします。今上の三の宮母あかしの中宮むらさきのうへの御やしなひ子御事也にほふの又、二品の宮のうみ給ひし若君、源氏のすゑの子とけいつにありといへとも、まことはかしは木の衛門督の子なり。それも此巻に元服して右近中将といふ（一・三類本モホボ同文）

〔細川文庫本〕 ひかり給ひて後、かのみかけに立つき給ふへき人そこらの御中にありかたかりけり。今上の三の宮はあかしの中宮むらさきのうへの御やしなひの御子ふの事な又女三のうみ給ひしわか君、これはけんしの御子といへ共まことはかしは木のゑもんのかみの子なり。それも此まきにけんふくして右近の中将といふ。

〔京大本〕 ひかり給ひて後、かの御かけにたちつき給ふへき人、そこらの御末々にありかたかりけり。今上の三の宮、紫の上の御やしなひの御子、元服し給て匂宮部卿の宮といへり、又女三のうみ給ひし若君、是は源

氏の御子といへ共、まことは柏木右衛門のかみの子なり。それも此巻に十四にて二月に元服して侍従になり。同じ年の秋右近の中将といふ。

三本、さほど大きな差違はないが、①の部分では、細川文庫本・京大本の本文が源語原典とほぼ完全に一致する。これはこの両本の最大の特色である、可能な限り源語の原文を生かすという姿勢のあらわれである。この箇所における両本の唯一の異同では、京大本の「御末々」の方が源語原典と一致する。又、京大本のみにみられる②③の部分も源語の本文をほぼそのまま引いてきたものである。即ち、京大本は、細川文庫本にもみられる源語原典を利用して梗概部分をより詳しくしていくという姿勢を、僅かではあるが更に進めた形になっているのである。②③の異文などは書写の段階で生じたものとは考えられないであろう。

この傾向がより明確に出てくる例を御法巻から引用する。紫の上を失った源氏の許に致仕太政大臣から消息が届けられる部分である。

〔細川文庫本〕 ちしのおとゝはむらさきのうへかくれ給へは、さためてけんしも世をそむき給ひぬへしと心ほそくおほしけり、あふひのうへかくれ給ひしも此ころなりければ御ふみあり。

〔京大本〕 ちしのおとゝも世にたくひなき人のはかなくうせ給ぬる事を口惜くおほして、しはしはとふひ給、

昔あふひの上くれ給ひしも此頃の事そかしとおほし
出て、御子の蔵人の少将して、

〔参考・源氏物語本文〕致仕の大臣、あはれををり過
ぐしたまはぬ御心にて、かく世にたぐひなくものした
まふ人のはかなく亡せたまひぬることを、口惜しくあ
はれに思して、いとしばしば問ひきこえたまふ。昔、
大将の御母上亡せたまへりしもこのころの事ぞかし、
と思し出づるに、いとの悲しく（中略）空のけしき
もただならねば、御子の蔵人少将して奉りたまふ。

京大本の本文が源氏物語原典により密接であることは一目
瞭然である。この部分、二類本一次本、一・三類本、いず
れも細川文庫本とほぼ同文で、僅かに「源氏物語提要」が
「御子の蔵人少将をして源氏へ歌を参らせ給ふ」^{（注12）}とある
のが京大本に近いものの、これとてそれ以前の箇所は京大
本と全く異なっている。結局、京大本は源氏物語の本文を
直接参照しながら書き改めたと考えざるをえないであらう。
二類本二次本は一次本に源氏物語原典の本文を大きく増
補することによって成立したと考えられるのだが、^{（注13）}二次本
の中では京大本の方がこの傾向を更に強めているといえよ
う。前節で述べた、一見細川文庫本の脱文のように見える
夕霧・御法巻の二例も、京大本にのみ存する部分が実は源
語の本文であることを考えるならば、これも、細川文庫本
の誤脱ではなく、京大本の段階で補われたものではないだ

ろうか。

勿論、相互に脱文があるから、細川文庫本に直接増補す
ることによって京大本が成立したのではない。細川文庫本
は慶長頃の書写であると思われるから、この両本の間には
書写年代にかなりの開きがある。恐らくは、細川文庫本
（又はその祖本）を、若干の補筆を行いながら書写したの
が京大本の祖本、という関係になるのではないだろうか。
又、一次本から二次本への補筆と、二次本内の細川文庫
本から京大本への補筆は、同じ目的意識の下に行われてい
るのである。従って、細川文庫本と京大本は、同一人物の
増補作業の過程を反映しているのではないか、とも考えら
れるが、これは推測の域を出るものではない。

五

前節では、京大本、細川文庫本の関係をその梗概本文を
中心に検討したが、次に両本の注記部分について考えてみ
たい。源氏大鏡の類は、源語の梗概を述べながら引歌・巻
名由来・人物考証・難義語句の注等々の記述を随時はさん
でいく。それらは本文中にみられるだけでなく割注や傍記
と様々な形をとる。注記の部分は梗概本文に比べると枝葉
末節の部分で流動性が強く、同系統の写本でも脱落したり
表記形式が異なったりする。従って伝本間の関係をみる場

合、決定的な決め手とはなりえないが、ある程度の傾向を知るためには有効な手がかりとなりうるであろう。

今、京大本・細川文庫本に存するこれら注記のうち、比較的長文のもの（十字以上）三一四箇所を取り上げ、これに一次本の代表として拔書抄を加えた三本間の注記の有無を検討し、相互の親疎関係の度合を数値で示してみる。

A 細京抜の全てに存する場合	一五九
B 細京に存し抜は欠く場合	六九
C 細に存し京抜に欠く場合	五八
D 細抜に存し京は欠く場合	二六
E 京に存し細抜に欠く場合	二
F 京抜に存し細は欠く場合	〇

右の数字から先ず看取できるのはBにあらわれた細川文庫本と京大本の親近性である。これは前節迄に得られた結論、即ち両本は二次本として同一群に位置するということとを裏付けるものである。

次にこの両本と拔書抄との親疎関係をみると、拔書抄と細川文庫本とに共通して存する注記がDの二六例に対して、拔書抄と京大本にのみ存する共通注記は皆無である。このことも又前節迄に得られた

一次本（拔書抄）→二次本（細川文庫本→京大本）という結論の補強材料となる。

最後に、Cの事例について考えてみる。一見拔書抄と京

大本との近さを示すようだが、これはみかけの一致とでもいべきものである。B・Cは共に一次本では存在しなかった注記を細川文庫本の段階で補ったものである。従って、Cの細川文庫本のみが有する注記は、拔書抄には本来存しなかったもので、又、京大本は祖本の段階では恐らく存していたが転写の過程で欠落したものと思われる。Fの、拔書抄、京大本にのみ共通する注記というものが皆無であることから、Cにおける拔書抄、京大本の注記の欠落は、生じた事情を異にすると考えるべきである。

細川文庫本は一次本に比べて大幅に注記を加えているが、京大本は一次本以来のもの、細川文庫本の段階で加わったものの、いずれをも相当量欠いていることがわかる。とすれば、細川文庫本と京大本との間には注記に対する明確な姿勢の差が存するようである。

ところで、物語中の和歌の詠者名を記すことも、初步的注釈の範疇に属することといえよう。難義語句等の注記を省略する京大本の傾向は、この詠者名の記載にもはっきりと現れている。源氏物語中の和歌七九五首のうち、拔書抄は333 335 780¹⁴の四首を、細川文庫本は333 335 450¹⁵ 793の四首を、京大本は122 333 335 793の五首をそれぞれ欠き、三本の所載和歌は約七九〇首である。このうち、和歌の右肩に詠者名を記さないものは、拔書抄七二首、細川文庫本七一首、京大本四三六首である。京大本は、細川文庫本などの約六倍、全

歌数の半数以上の和歌の詠者名を欠いているのである。しかもそれは、全巻を通して平均して欠けているわけではなく、若菜巻辺りから特に顕著になってくるのであるから、これはやはり書写態度の現れとみるべきであろう。

此様に、京大本には和歌の詠者名も含め、注記的部分を軽視する傾向があるようである。思うにこれは、京大本の祖本以来の性質というよりも、祖本からの転写を重ねる過程、恐らくは京大本そのものの書写者の資質に帰されるものではあるまいか。

ともあれ、注記的部分に関しては、京大本はこれを省略する傾向にあるのだが、残されている部分を比較する限りにおいては、一次本との距離が細川文庫本よりもやや遠いということが確認できよう。

六

最後に、京大本の記述において注目すべき箇所を二、三あげておこう。

まず雲隠の記事を見てみる。雲隠巻に関する記述は一類本・二類本一次本・三類本、何れも独立したものとして扱わず、幻巻の巻末記事の一つとして記されているが、二類本二次本のみ、巻名を見出しに立てて一巻の記述の体裁を取っている。但し、その内容は両本かなりことなる。京大

本の記事は以下の如くである。

〔京大本〕此巻は有名無実也。甚深の像なり。天台四門亦有亦空門之意也。桐壺の更衣逝去之事より書始て、さて紫上死去之事に至て、既事尽、終焉不言之。若書之所言語道断一也。又無珍氣、仍雲隠中に譲之^{云々}。廿五のまほろしより廿七へうつるなり。此間八、九年と見えて、四才・五才の若君達皆元服し給ひしなり。其間に失給ふ人々源氏をはしめ、朱雀院、螢兵部卿の宮、致仕の大臣、髯黒、此人皆逝去などの事雲かくれにこもれり、源氏のかくれ給ひし事、いつもあらはさす

「廿五のまほろしより」云々以下の部分は、細川文庫本と完全に一致する。又、源氏大鏡一―三類本も全てほぼ同文である。それ以前の部分は、細川文庫本では「此巻はあまりにあはれにて人の心をまどはしけるにや、近代は宇治の宝蔵にこめられて世になし」となっている。一類本・二類本一次本何れもこの本文を有しているから、細川文庫本はそれらを踏襲しているのであろう。京大本のような本文は、「源氏物語提要」「光源氏一部歌」「源氏最要抄」等、他の梗概書にも見出しえない。

京大本の記述に最も近いのは「弄花抄」の匂宮巻頭の記述である。

（前略）有名無実事天台門事譬之^{在河海}（中略）又五十

四帖皆亦空之意也（中略）自桐壺至紫上既事尽——故光源氏終焉不言之 若書之者可言語道断也 又無珍気仍雲隱卷之中讓之也^{（注16）}

尤も、「弄花抄」の雲隱の記述は幻卷々末・匂宮卷々頭の二箇所にかなり長文の記事を有しており、右はそのごく一部分に過ぎない。又、「弄花抄」の記述は「孟津抄」「岷江入楚」「紹巴抄」「湖月抄」等にも引用されているから、京大本の筆者がそれらの何れを直接参看したのかは定かでない。但し、これらの中では、量的・質的に京大本の雲隱の記述に最も近いのは「紹巴抄」^{（注17）}のようである。

次に、幻卷の「うなひ松」の注であるが、この部分、一・三類本、二類本一次本は注が存在しない。細川文庫本・京大本のみがこの語句に注を付するが、両本の文章はやはりかなり異なる。細川文庫本は「もろこしにうなるといふ龍馬あり、七十二さいにてめつしたり」「日本のうこんのはゝの松にたとへたり」という、主要な諸注釈書には見えぬ記述を含むのに対し、京大本では以下のような記述になっている。

馬鬣^{（注18）}松とて、たかくつかをつき、うへに松をうたへたるをいへり、此松馬のたちかみのやうにありしと也 たとへは松をなき人のかたみと見るかごとく、中将の君を紫の上の形みと見た

よし也。

量的には、細川文庫本の約四分の三程度で、内容も諸注に記す所から逸脱せず、特に「花鳥余情」^{（注18）}の記述とほぼ重なりあい、穏当な文章に改められているといつてよいだろう。但し、「花鳥余情」の文章は「孟津抄」「岷江入楚」「湖月抄」等にも引用されており、特定できないのは雲隱の場合と同様である。猶、「紹巴抄」は「花鳥余情」を引いていない。

和歌の詠者名に関しても、注目すべきものを一つあげておく。細川文庫本と京大本の詠者名の異同は「姫君」↓「雲居雁」のような同名異称や、「あるしの君ひかる」

書目	和歌		
	342 うきしまを	343 行くさきも	344 うきことに
源氏物語提要	①兵部の君	②玉かつら	③玉かつら
光源氏一部歌	③ひやうぶの君	①玉かつら	②めのと
一類本	②めのと	①姫君	③ひやうふきやう ^{（注19）}
二類本一次本	①玉かつら	②同	③同
細川文庫本	①ひやうぶの君	②同	③同
京大本	①兵部の君	②玉葛	③此歌一説に兵部のきみいつれても
三類本	②兵部君	①ひめ君	③兵部のおもと

（丸カコミ数字は歌順を示す）

(細) ↑ ↓ 「あかしの君」(京)のようなケアレスミスが殆どであるが、玉鬘巻344番の和歌は、詠者名に関する異説を並記するという点で興味深いものである。猶、342・344番の和歌は、源氏物語梗概書において、歌順・詠者名が様々に異なるが、それらの主要なものをあげたのが、前頁の表である。

京大本と、歌順・詠者名共に重なるのは「源氏物語提要」である。源氏大鏡の中では三類本が京大本に近いが、歌順は異なる。とにかく梗概書諸本間で此様な異同がある中で、京大本は、歌順・詠者名ともに、比較的妥当なものとなっているといつてよいだろう。

猶、344の和歌の詠者名注記に関しては、「紹巴抄」が

うき事に歌、名のみイ本玉鬘也、兵部と云説何も也と記しており、上述の雲隠巻の記述と合せて注目すべきものである。

七

叙上の如く、京都大学本「源氏物語」は、細川文庫本「袖鏡」と共に、源氏大鏡二類本の中で、増補本即ち第二次本と呼ぶべきものである。二類本一次本から二次本への増補はかなり大幅なものであり、場合によっては、この二次本のみが一三類本総体と明確な対立本文を有すること

も少くない。又、二次本の中でも、京大本と細川文庫本との間には微妙な差が見られる。二次本そのものも単一のものではなく、増補作業は僅かではあるが継続されていたものようである。

そもそも源氏大鏡の一三類本自体が、改変・増補の繰り返しの中で分派したものであるが、改変作業はこの段階のみにとどまらず、その後も不断に行われていたことを、二類本二次本の存在は示している。京大本・細川文庫本は、梗概書の伝流・書承・派生の複雑な実体の一面を垣間見させる貴重な資料と言えよう。

注

- (1) 「細川文庫本『袖鏡』について」(『文学研究』78輯、昭和56・2)
- (2) このうち第四類本は「三類以外の諸本でありながら密接な関係を持つもの」の総合的名称であるため、本稿の考察の対象からは除く。
- (3) 昭和42年刊、補訂版昭和58年刊。
- (4) 『国文教育』昭2・10。昭3・1。
- (5) 『国語国文の研究』昭3・11・4・3。
- (6) 一類本系黒川本・穂久邇文庫本・東大本・島原松平文庫本、三類本系狩野文庫本・天理図書館本・九大本等。
- (7) 二類本系永青文庫本が明石迄・若菜下迄・柏木以下と、刈谷図書館本が賢木迄・藤裏葉迄・若菜上以下と巻を分ける例はある。
- (8) 『古典文庫』404、昭和55年刊。

- (9) 本稿では、一類本として、ノートルダム清心女子大学蔵黒川本を使用し、穂久邇文庫本を参照した。三類本としては、東北大学蔵狩野文庫本を使用し、九大本を参照した。
- (10) 「しゃかほとけくかいのぐんるいのまよへるさまをかなしひ給ひて」(抜書抄『古典文庫』七頁十二行)、「ふたいてんぼうりんのまことのみちにいたらしめんと」(同、八頁八行)
- (11) (注1) 拙稿。猶『袖鏡』影印本解説(『在九州国文資料影印叢書』二二三、昭56)では、A・B系統という呼称を用いたが、同様の理由で改める。
- (12) 『源氏物語提要』の本文は『源氏物語古注集成』2(昭53)に拠る。
- (13) (注1) 拙稿。
- (14) 『物語和歌総覧』の番号による。以下同。
- (15) (注1) 拙稿では541542を欠くとしたが、450の誤である。
- (16) 「弄花抄」の本文は内閣文庫本(『源氏物語古注集成』8、昭58)に拠るが、同書に対校されている陽明文庫本によって、一部改めた。
- (17) 「紹巴抄」は、稲賀敬二氏所蔵本(『翻刻・平安文学資料稿』第二期、昭51)を使用した。
- (18) 「花鳥余情」は、初稿本系松永本(『源氏物語古注集成』1、昭53)を使用した。
- (19) 穂久邇文庫本に拠る。黒川本はこの歌の詠者名注記を欠く。